

---

## ■英国のことあれこれ (3)

### 楽しい間違い

中央大学教授 市川 泰男



勤務先の大学には4つの門がある。私は多摩動物公園駅から少し歩いたところにある、春夏には緑の、秋には紅葉の、そして冬には葉を落とした木々に覆われた緩やかな上り坂を、自然を味わいながらゆっくり歩いて北門からキャンパスへ入るのが好きだ。ある朝、年配の男性とその孫らしき2人が動物公園の休園日を知らせる掲示を見てがっかりしている光景を駆で目にした。今時、動物園がいつ休園なのかなどは電話やインターネットですぐに調べがつくものだから、ある意味では大人の不注意が子どもを失望させることになっているのだ、とか、いとも簡単にできることが何でできないのだろうか、などと思いながら大学へ通じる道を歩いた。

かくいう私も同様の失態を演じたことがある。在外研究中の夏のある日に、ヘンリー・ジェイムズの読書会でお世話になっていた先生ご夫妻がケンブリッジの我が家に一泊することになった。旅行でロンドンに来ていた合間にケンブリッジに私を訪ねてくださったのだ。1日目にケンブリッジを見て回ったあと、2日目はロンドンに戻る予定であったが、せっかくだからということで、ドライブがてらにカンタベリー寺院とドーヴァー城を見てからライ(Rye)へ行き、ヘンリー・ジェイムズが住んでいた家(Lamb House)を見学することにした。ライからは1066年のNorman Conquestで有名なヘイスティングズ(Hastings)までお送りし、そこから列車でロンドンへと戻っていただく計画を立てた。ヘンリー・ジェイムズご専門の先生にどうしてもラム・ハウスを見学していただこうと意気込んで出かけたが、生憎、その日は休館日だったのだ。仕方なくラム・ハウスを外から眺めた。その後、イングランドで最も大きな暖炉を誇るラウンジ・バーがあることでも知られているマーメイド・インで一服してからライを去った。

昨年の夏、友人夫妻にブリストルから車でほぼ1時間のところにあるウェルズ(Wells)というこじんまりとした町に連れて行ってもらった。町と書いたが、そこはイングランドで最も小さなシティであり、立派な聖堂(写真)と主教の公邸(ビショップス・パレス)などが多くの観光客を集めている由緒あるシティだ。このウェルズという名称は今でも水が滾々と湧き出ている井戸に由来する。当然、私たちは聖堂や井戸を見て回ったが、友人夫妻はビショップス・パレスのお堀に住んでいる白鳥が昼の12時きっかりにベルを鳴らし餌をねだると聞いて、それを私たち(私の妻と私)と一緒に見ようと思ったのだった。12時5分前頃からベルの見える所で白鳥が来るのをじっと待っていたが、運悪く、白鳥に餌を与えている人がいて、白鳥はついにベルを鳴らさなかった。私たちは、友人の知人が教えてくれたという情報を信じて固唾を呑んで待ち構えていたのだが、不埒者(?)のせいでその瞬間を目撃することができなかった。でも、確かにウェルズのカレンダーなどにはBell-ringing swansの写真があり、白鳥は餌をもらうためにベルを鳴らすように19世紀から仕込まれていたという説明がある。インターネットでウェルズを検索すると同様の記述が見られるので、白鳥がベルを鳴らすのは本当の話なのだろうが、かっさり12時に、というのは尾鰭がついてのことだったようだ。

この情報の時間に関する部分は現地に行って観察して初めてそれが正しくないことが分かったものだが、そのことで「奇怪なことは面白いし、楽しい間違いは積極的には暴露されないものだ。正確な話はあるにふれてははず、厳密に学問的な人はそうそうはいないので、頻繁に起こっているだけなのに絶え間がないとか、実際には偶発的な事を一定不変とか表現しがちである」というサミュエル・ジョンソンの言葉を思い出した。

---